

受難節第2主日礼拝説教「見えるようになる」

日本基督教団石神井教会 2020年3月8日

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 5章6～14節

⁶むなし言葉に惑わされてはなりません。これらの行いのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下るのです。⁷だから、彼らの仲間に入れられないようにしなさい。⁸あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい。⁹—光から、あらゆる善意と正義と真実とが生じるのです。—¹⁰何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。¹¹実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。¹²彼らがひそかに行っているのは、口にするのも恥ずかしいことなのです。¹³しかし、すべてのものは光にさらされて、明らかにされます。¹⁴明らかにされるものはみな、光となるのです。それで、こう言われています。

「眠りにについている者、起きよ。

死者の中から立ち上がれ。

そうすれば、キリストはあなたを照らされる。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 9章1～41節

¹さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。²弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」³イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。⁴わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ目のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。⁵わたしは、世にいる間、世の光である。」⁶こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねて、世の人の目にお塗りになった。⁷そして、「シロアム—『遣わされた者』という意味—の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。⁸近所の人々や、彼が物乞いであったのを前に見ていた人々が、「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。⁹「その人だ」と言う者もいれば、「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそんなのです」と言った。¹⁰そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、¹¹彼は答えた。「イエスという方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」¹²人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。

¹³人々は、前に盲人であった人をファリサイ派の人々のところへ連れて行った。¹⁴イエスが土をこねてその目を開けられたのは、安息日のことであった。¹⁵そこで、ファリサイ派の人々も、どうして見えるようになったのかと尋ねた。彼は言った。「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」¹⁶ファリサイ派の人々の中には、「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいた。こうして、彼らの間で意見が分かれた。¹⁷そこで、人々は盲人であった人に再び言った。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか。」彼は「あの方は預言者です」と言った。¹⁸それでも、ユダヤ人たちはこの人について、盲人であったのに目が見えるようになったということ信じなかった。ついに、目が見えるようになった人の両親を呼び出して、¹⁹尋ねた。「この者はあなたたちの息子で、生まれつき目が見えなかったと言うのか。それが、どうして今は目が見えるのか。」²⁰両親は答えて言った。「これがわたしどもの息子で、生まれつき目が見えなかったことは知っています。²¹しかし、どうして今、目が見えるようになったかは、分かりません。だれが目を開けてくれたのかも、わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」²²両親がこう言っ

たのは、ユダヤ人たちを恐れていたからである。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのである。²³両親が、「もう大人ですから、本人にお聞きください」と言ったのは、そのためである。

²⁴きて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」²⁵彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです。」²⁶すると、彼らは言った。「あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。」²⁷彼は答えた。「もうお話ししたのに、聞いてくださいませんでした。なぜまた、聞こうとなさるのですか。あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか。」²⁸そこで、彼らはののしって言った。「お前はあの者の弟子だが、我々はモーセの弟子だ。²⁹我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。」³⁰彼は答えて言った。「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。³¹神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。³²生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。³³あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかつたはずです。」³⁴彼らは、「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と言い返し、彼を外に追い出した。

³⁵イエスは彼が外に追い出されたことをお聞きになった。そして彼に出会うと、「あなたは人の子を信じるか」と言われた。³⁶彼は答えて言った。「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」³⁷イエスは言われた。「あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。」³⁸彼が、「主よ、信じます」と言って、ひざまずくと、³⁹イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

⁴⁰イエスと一緒に居合わせたファリサイ派の人々は、これらのことを聞いて、「我々も見えないということか」と言った。⁴¹イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」

「どうして？」という問い

新型感染症の拡大する中で、9年前に発生した東日本大震災の追悼行事が軒並み中止になっているようです。致し方ないことかもしれません。キリスト教会の間でも、日曜日の礼拝以外の集会はほとんど中止となっているのです。日曜日の礼拝さえ、先週は中止にしていなかった教会でも、今日の主日礼拝を中止にせざるを得なくなったところがあると、伝えられてきています。実際のところ、感染のおそれがどの程度あるのかも分からないまま、今後どのように事態が収束していくのかも見えないまま、だれもが不安の中に置かれてしまっているようです。

災害に見舞われるたびに、わたしたちは、思いがけず被災し、また愛する人たちを失った人々が、「どうして？」と問わずにいられなくなる姿を見てきました。そして、そのように問い続ける人々の傍らに伴わせていただきながら、「どうして？」と問い続けても決して正解にたどり着けないことを、教えられてきたのではないのでしょうか。しかし、そうであればこそ、わたしたちは、「どうして？」と問い続けるしかない人たちの傍らに立たせていただき、正解にたどり着くことのない歩みに伴わせていただく意味がある、と教えられてきたのです。

今、わたしたちの社会を覆っているのは、そのような「どうして？」という問いではありません。自分や周囲の者がただちに対処しなければならない問題に直面しているわけではないのに、何が本当に起こっていることなのか分からないという不安、先行きの見えない不安が、じわじわとわたしたちを追い詰めているようなのです。新型ウィルスそのものの感染に対する恐怖よりも、ずっと厄介なものが、わたしたちの間に蔓延し始めているのかもしれません。

そうであればこそ、わたしたちは、キリストに従う者の群れとして、あらためて自分たちの立つべきところを問われているのではないのでしょうか。

「神の業が現れるため」

福音書日課（ヨハネ 9 章）が物語るのは、生まれつき目の見えない人が、主イエスと出会い、シロアムの池で目を洗うように告げられると、見えるようになったという出来事です。

目の不自由な方は、わたしたちの周囲にも多くいらっしゃいます。そのような方にとって、教会は必ずしも十分な対応をできていないところかもしれません。点字の聖書や讃美歌を用意することはできますし、動作のお手伝いをさせていただくこともある程度はできるでしょう。けれども、礼拝の営み一つとっても、基本的には目が見える者の視点ですべてが整えられています。文字を見ていただき、楽譜を見ていただき、奉仕者の所作を見ていただき、余計な説明をしなくても了解してもらえることを期待して、皆さんを迎えているのです。わたしたちは、ときには、目で見ることを止めて、耳と手の感触だけを頼りに礼拝にあずかってみるということをしてみるべきなのではないか、と思うことがあります。もちろん、それは、目が見えない人の傍らに立たせていただき、共に歩ませていただくためです。当然のことですが、そのような方を教会にお迎えするときに、わたしたちは、「見えないのは、どうしてですか？」と問う必要はないのです。

シロアムの池で目を開いてもらうことになる男を前にして、弟子たちは、なぜ、その人の目が見えない原因を問うたのだらうかと思えます。もちろん、二千年前の時代ですから、現代医療の眼科的な知見は、どこにもありません。弟子たちがその原因を「罪」として見ることしかできなかったは、致し方ないことです。現代人のわたしたちであれば、もう少し医学的なこととして問うたかもしれません。そうしたならば、眼科的な治療方法を主イエスに答えていただくということになったのでしょうか。あまりそのようには思えません。

主イエスは弟子たちの問いに対して、実のところまっすぐ答えられていません。弟子たちが目の見えない「原因」を尋ねたのに対して、主イエスは、その「目的」を答えられているからです。「どうして？」「なぜ？」ではなく、「何のために？」という問いに、主イエスは置き換えて、答えられたのです。

「神の業がこの人に現れるため」。これが、主イエスの立ち位置なのでしょう。主イエスが弟子たちにお示しになられた、わたしたちの立つべきところ。一人の人の中に、神の業が現れるようになる、見えるようになるところ、です。

「今は見える」

シロアムの池の出来事を伝える物語を、しかし、ヨハネ福音書は簡単に終わらせていません。長い物語として、9章を丸ごと、この出来事に充てました。

そこには、あの生まれつき目の見えなかった男の周囲の人々が、次々と登場します。初めに「近所の人々」、隣人たちです。続いて「ファリサイ派の人々」、熱心な信仰に生きていた人たちです。さらに「ユダヤ人たち」と呼ばれる人たちが現れ、ついには、その人の「両親」まで引っ張り出されています。しかし、どの人たちも異口同音に、彼に問うのです、「どうして見えるようになったのか？」と。「どのようにして目が開かれたのか？」と。

主イエスの弟子たちが、まだ目が見えないままであったあの人を指差して、「この人が目が見えないのは、どうしてですか？」と問うたのと同じ問いです。目が見えるようになって、なお、この人は、「どうして、そうなったのか？」と、その原因を問われているのです。

「どうして？」と、わたしたちは問わずにいられないのでしょうか。原因を捜して、問題の犯人を捜し出して、納得したいのです。そこに「意味」を見出したいのです。ただ、その問いは、必ずしも答えがあるとは限りません。確かにそれは、過去にすでに起こったことを問うているのですから、答えがあるはずなのです。しかし、その答えをわたしたちは、見出すとは限らない。むしろ、その答えが分からずじまいになることが、少なくない。そのとき、わたしたちは、不安に襲われるかもしれません。あるいは、その問いで問うている「過去」に縛り付けられたまま、身動きできなくなってしまうかもしれません。

主イエスが、なぜ「目的」を問われたのか。「**神の業がこの人に現れるため**」と、その「目的」を告げられたのか。

あの人は、見えるようになりました。それは、眼科的に見えるようになったというだけのことではないはずです。「神の業」が見えるようになった、ということであるはずです。彼自身の中に働いてくださっている「神の業」が見えるようになったとき、彼は、もはや「どうして？」と過去を問う必要がなくなったのです。今まで見えていなかった「神の業」が見えるようになったとき、彼は、神の為してくださる新しい将来を見るようになったからです。

古代教会の教父たちは、異口同音に、このシロアムの池で癒された男の物語を、信仰者誕生の物語として教えました。その人は、主イエスが手を差し伸べて「**土をこねてその人の目にお塗り**」くださるまで、主イエスのことを知りませんでした。救いを求めたわけでもありませんでした。しかし、主に示された池に行き、目を洗いました。水に浸かりました。洗礼を受けたのです。彼が変わり始めたのは、それからです。多くの人に問われました、「どうして？」と。そのたびに、彼は、新しく変えられて行きました。神が自分にしてくださった御業を語り始めたのです。そして、主イエスとあらためて出会う経験をしました。信仰者は、そのように誕生し、生涯をかけて変えられて行くのです。

「今は見える」。わたしたちは、ここで、そう共に証しするのです。